- **「シリーズ平和教育学」オンライン講座**

（2024年 1月）

- 元京都教育大学教員　村上登司文
- 【講座の概要】世界各地で紛争や戦争が続き、平和の問題を子どもたちと一緒に考えることが重要となっています。一方で、戦争体験者が減少する中で、平和教育の実践を若い人々に伝えることも必要となっています。　2022年3月に京都教育大学を退職したのを機会に、大学での授業内容を基に、オンライン「シリーズ平和教育学」として、2024年1月に第2回の講座を開講します。なお、第1回の講座は2023年7月に実施しました。
- 1/12　次世代による戦争体験の継承
- 1/19　平和教育のカリキュラム
- 1/26　ドイツの平和教育
- 【受講対象者】平和教育に関心がある学生、学校教員、元教員、社会人など
- 【講座の受講方法】オンライン配信：Zoomによるオンライン講座（約1時間）を行います。前半の30分は村上がプレゼンし、後半の30分は受講者との対話の予定です。

次世代による戦争体験の継承

- ○内容紹介
- 戦争体験の継承が、体験者を父母とする戦争体験第2世代と、体験者を祖父母とする第3世代（合わせて次世代）によって行われ、現在は平和教育の過渡期にある。
- 78年前の戦争を伝えるためには、学習方法の工夫により、今起きている戦争の学習に繋げていく。
- 戦争体験の継承活動を若手教員や子どもたちが担うためには、活動に参加する当事者意識を高めるプロセスを必要とする。

表1 戦争体験による世代の分類

（2025年を計算の基準）

世代の名称（略称）	生まれた年	2025年に何歳	該当者
戦争体験第１世代（第１世代）	1916～1945	80歳～109歳	後期高齢者以上
戦争体験第２世代（第２世代）	1946～1975	50歳～79歳	中年・高年教員、退職、教員
戦争体験第３世代（第３世代）	1976～2005	20歳～49歳	大学生、若手教員
戦争体験第４世代（第４世代）	2006～2035	19歳以下	小学生、中学生、高校生

注： 2025年を計算の基準とすれば、第１世代は1945年以前の戦前生まれで80歳以上である。

図1　調査年別にみた第二次大戦継承のエイジェント

（中学生への意識調査　複数回答、数字は％）

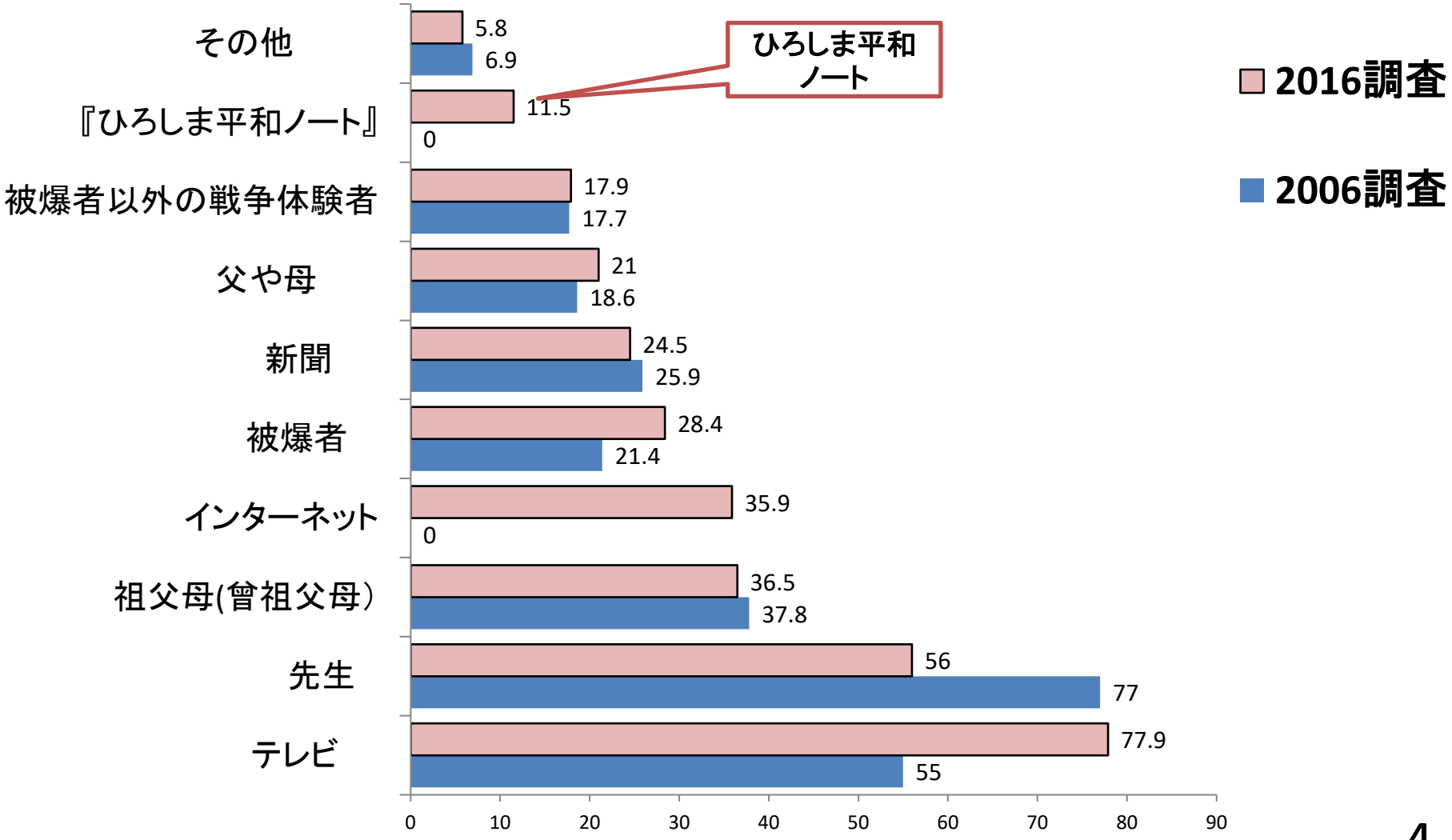

図2　国別第二次世界大戦継承のエイジェント

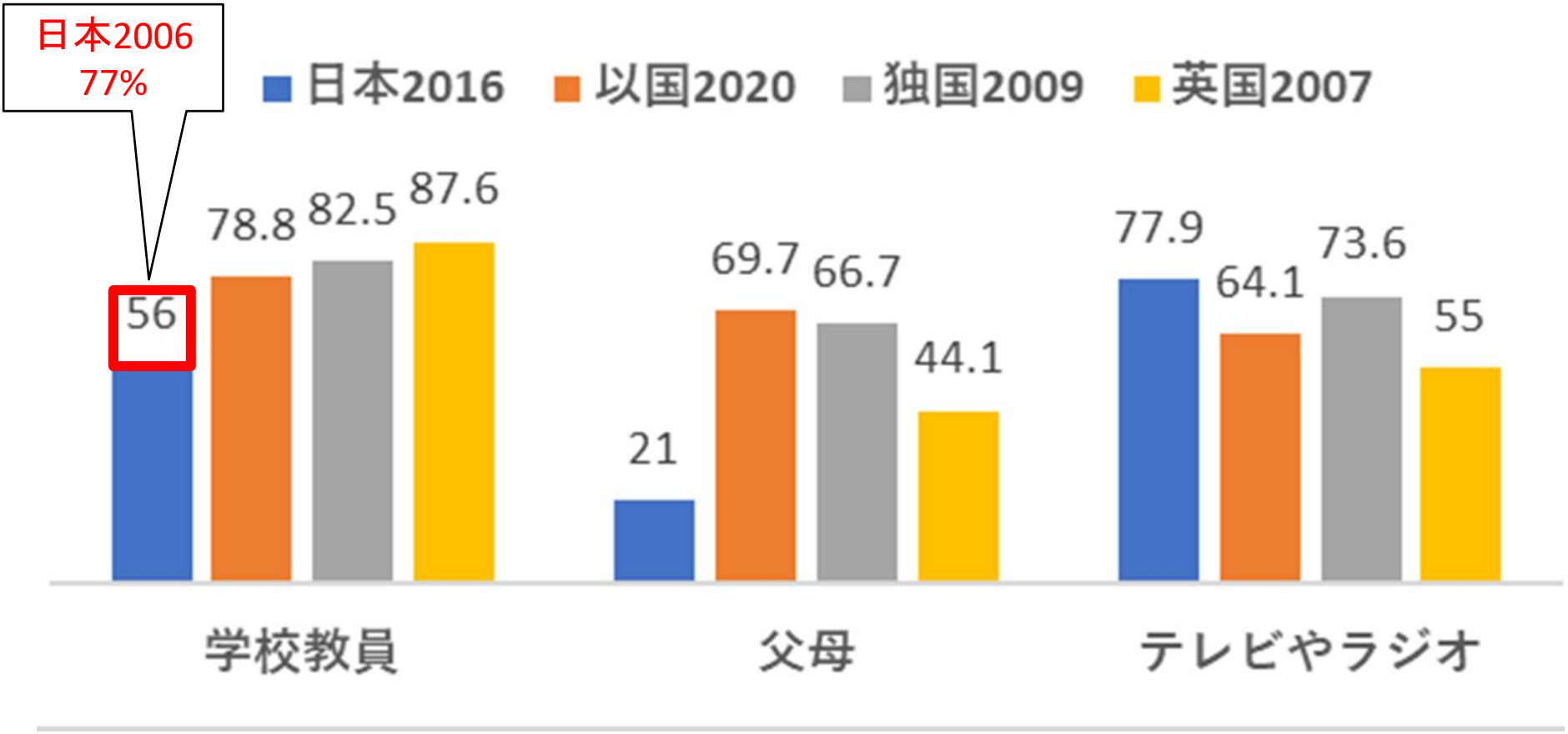

表2　語りのタイプ

語りのレベル（例）	語りのタイプ	別名
大きな所属集団 （社会、国）	標準的語り	マスター・ナラティブ
小さい所属集団 （共同体）	定型的語り （語りの雛形）	モデルストーリー
語りの場（対面）	非定型的語り （個別の語り）	

表3　戦争体験継承への当事者意識の形成過程のステップ・モデル

①情操的土台づくり：　戦争被害への共感的な理解を深める心情的素養を培う。
②心理的距離の縮小：　戦争体験と〈人、場所、モノ、時間など〉でつながる方法で学習する。心理的距離を縮める。
③想いの共有：　平和形成への想い（願い）も共有する。
④連帯的共感：　戦争被害者の個別的な体験的事実に寄り添い、連帯感を持つ。
⑤意義の理解：　継承活動の意義を認める［語り継ぐ意義］。
⑥継承の当事者：　戦争体験の継承活動に、当事者意識を持って継承活動に参加する。
⑦継承の主導者：　継承伝承）活動の輪を広げようとする。

戦後世代の平和ガイド

- 平和ガイドとして大切なのは「つなぐ」ことであり、それは学習内容と生徒をつなぐ、戦争体験者と生徒、人と人を結びつけることもあるし、子ども同士をつなぐことが平和ガイドの大きな役割といえよう。
- 平和ガイド自身がどのようにして戦争と「つながり」、そのつながりのプロセスの中で自身の心境がどう変化したかを語ることが意味を持ってくる。
- 話の聞き手側からすれば、平和ガイドという一人の人間のリアルな心の動きを知ることで、聞き手側の心境に変化をきたすことができるのだろう（増田 2016）。
- 必ずしも戦争体験第１世代を媒介とせずとも、平和ガイドから聞き手へ、聞き手から別の聞き手へとつながり、平和について考えを深めてゆくことができると考えられる。

表4 戦争体験継承のモデル

戦争体験を用いて平和教育を行う手法が、平和教育研究として深められてきた。
想定され、試行される戦争体験継承についてのプロセス・モデルは：

1. 地域や体験者個人が有する戦争体験と、学習者自身とを重ねる。
2. 戦争被害と戦争加害を合わせた多面的視点から戦争を立体的に認識する。
3. 自分の戦争観を固定化せずに変わりうるものと認識する。
4. 戦争体験者・展示内容・他者と「対話」を重ねることにより、自己の戦争観を生成（再構築）していく。
5. 戦争の問題（戦争体験継承など）を自分の課題として、当事者意識を持って対峙し、平和のために社会参画する。

表5 戦争体験を「語り継ぐ」の関連年表（期間：1990～現在）

1990 原爆遺跡フィールドワーク（原爆遺跡保存運動懇談会）が始まる
1993 立命館大学国際平和ミュージアムで平和ボランティアガイド養成講座を開始
1998ピースボランティア事業が始まる（ヒロシマ平和文化センター）

2002 ひめゆり平和祈念資料館「次世代プロジェクト」（説明員による語り）を開始
2004 沖縄県平和祈念資料館が「ボランティア養成事業」を開始
※ 2005年頃から戦争体験の「語り」のアーカイブズ化が進む［外池 2018a］
2007.8 NHK「証言記録 兵士たちの戦争」の放送開始（2010 本格オープン）

2012 広島市市民局が「被爆体験伝承者養成事業」を開始
2013 『ひろしま平和ノート』を広島市立学校の児童生徒に配布開始（2013年度より）
2015 広島平和記念資料館で、研修修了者が伝承活動を開始
2016 厚生労働省が、戦没者遺族・戦傷病者・中国残留邦人などの戦中・戦後体験を継承する「戦後世代の語り部育成事業」を開始
2018.3 『“次世代型”の平和教育：戦争を「語り」・「継ぐ」』（学研）の発行

2021 アメリカでAI（人工知能）を用いて、ホロコースト証言者と対話
2022 質問リストにより、AIが被爆者や空襲の語り部の証言を選ぶ。

表6 戦争体験を継承する平和教育の類型

分類要因＼類型		第２世代型	第３世代型	次世代型
実践の時期		1960・70・80年代	80・90・2000年代	2000・10・20年代
戦争体験の聞き手（聞き手の生年）		第２世代（1945年～1975年頃）	第３世代（1976年～2005年頃）	第４世代（2006年～2035年頃）
戦争体験の語り手	戦争体験者	両親	祖父母	曾祖父母
	語り手	戦争体験者	証言者・語り部	伝承者
	利用メディア	新聞・雑誌［読む］	テレビ・ビデオ［視聴］	＋ HPアーカイブズ［探索］
戦争体験の状況		風化	継承	伝承・語り継ぐ
戦争体験の内容		戦争被害中心	戦争加害も付加	平和創造も付加
継承の方法		体感型	講話型 語り手から一方向	＋対話・課題解決 話し手聞き手の双方向
継承の目標		言い伝え	継承＋発信	＋平和の創造

平和教育学から見た平和教育のこれから

従来型（伝統的）平和教育→　次世代型の平和教育

①平和教育の目的として、「知的な認識」の育成を

②方法の重視：「目的重視の平和教育」→「方法重視の平和教育」

- 子どもが主体的に参加できる学習方法を：教師中心の平和教育→子ども中心の平和教育

③内容面では、平和教育のマンネリや形骸化を防ぐ

- 子どもの発達段階に応じた平和教育のカリキュラム化を

〇平和形成の力

- 現代社会で子どもが対峙する平和課題の解決を考察できる力を
- 平和形成の活動に当事者意識を持つ主体の育成を

★④変動する国際社会で平和形成の主体を育成するために、平和教育の目的・内容・方法についての「総合的な再構築」が求められ続ける。

参考文献・資料

- 蘭信三ほか編 2021、『なぜ戦争体験を継承するのか：ポスト体験時代の歴史実践』。
- 大石学監修 2018、『戦争体験を「語り」・「継ぐ」 広島･長崎･沖縄ー「新世代型の平和教育」』。
- 外池智 2018、『継承的アーカイブの活用と「次世代型の平和教育」の構築』2015-2017年度科研費補助金（基盤研究（ｃ））研究成果報告書。
- 日本教育学会国際交流委員会編 2022『ウクライナ危機から考える「戦争」と「教育」』。
- 増田友紀　2016、「Ⅳ．平和ガイドによる戦争体験継承」、村上登司文他「沖縄の平和教育－平和教育の現代化への課題－」『教育実践研究紀要』16。
- 宮地尚子編 2021、『環状島へようこそ　トラウマのポリフォニー』。
- 村上登司文 2017、戦争体験継承が平和意識の形成に及ぼす影響－中学生に対する平和意識調査の時系列的分析－」『広島平和科学』38号。
- 村上登司文 2018、「戦争体験を第4世代（次世代）に語り継ぐ平和教育の考察」　『広島平和科学』40号。
- 村上登司文 2021、「2000年代の日本の平和教育ー社会学的研究方法による分析」日本平和学会編『平和研究』58号。
- 村上登司文 2022、「2000年代以降の平和教育研究の動向と成果」『広島平和科学』44号。
- 森川敦子 2017、「広島市立学校平和教育プログラム」『平和教育学事典』
- 矢口祐人　2023、「歴史博物館におけるAIと証言者」『AIから読み解く社会』東京大学出版会